

鼎新北科外语学者丛书



日语助词“ばかり”的诸用法

——用法分类和例句分布的特征

朱琳 著



对外经济贸易大学出版社
University of International Business and Economics Press

鼎新北科外语学者丛书

日语助词“ばかり”的诸用法

——用法分类和例句分布的特征

朱 琳 著

对外经济贸易大学出版社

中国·北京

图书在版编目 (CIP) 数据

日语助词“ばかり”的诸用法：用法分类和例句分布的特征：日文 / 朱琳著. —北京：对外经济贸易大学出版社，2020.10

(鼎新北科外语学者丛书)

ISBN 978-7-5663-2206-7

I. ①日… II. ①朱… III. ①日语-助词-研究
IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2020) 第 179784 号

日语助词“ばかり”的诸用法

——用法分类和例句分布的特征

朱琳 著

责任编辑：郭玉红

出版发行：对外经济贸易大学出版社

邮政编码：100029

社 址：北京市朝阳区惠新东街 10 号

邮购电话：010-64492338

网 址：www.uibep.com

发行部电话：010-64492342

资源网址：www.uibepresources.com

E-mail: uibep@126.com

成品尺寸：170mm×240mm

印 刷：北京九州迅驰传媒文化有限公司

印 张：10

版 次：2020 年 10 月北京第 1 版

字 数：154 千字

印 次：2020 年 10 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-5663-2206-7

定 价：45.00 元

本书为北京科技大学中央高校基本科研业务费专项基金
(Fundamental Research Funds for the Central Universities)
资助项目 (项目名: 外语学科的综合发展与特色培育
研究, 项目编号: FRF-BR-17-007B)

总 序

AI时代加速到来，外语学者仿佛走到绝壁悬崖，纷纷探寻出路。

我们的信念是，提倡人文，坚持鼎新。智能时代固然无法抗拒，但科技无法给予人性的温度，无法产生人文的光辉。唯有与人声相应、与文气相通，才能共生未来。因而，外语学者必须是人文的、人性的、人味的。他们应以独特的个体思考，“标新理于众家之表”“立异义于众贤之外”。最终，从人文出发，达于鼎新之境，立于不被时代淘汰的先声之地。

奉人文鼎新为主臬，北京科技大学外国语言文学学科砥砺前行、蓬勃发展。2006年获批外国语言文学一级学科硕士点，2011年获批外国语言文学一级学科博士点，已成为本硕博齐全、特色明晰、规模适度、注重质量、在国内具有一定实力和影响的外语人才培养单位和研究单位。纵观英、日、德三个语言文学学科，无不以“人文”思想贯之，展现了解放思想、力求突破的鼎新理念。

人文教育关心人类的终极目标。它不仅关注人类的人性和命运，也关注人类境况的不同和统一。本套丛书就是这一人文思想的结晶，该丛书囊括了英语、日语和德语世界的多维度研究成果。凭栏静听，世界各国皆有所思；沧海横流，英雄各路方显本色。这些著作有助于我们认知人类知识多样的呈现方式，探索人类命运的整体性和同一性，如此方能知其利弊得失所在，形成我们自己权衡取舍的广阔视野。

鼎新理念乃北科外语学者之教研风尚，催生了新一代之学术思想——求知更要求智，蜕故更要孳新。这套丛书无疑是这一学术思想的最佳体现，皆为我院不同学科背景的教师近年来最新的探索之作。事实上，人文鼎新之于我们，不仅仅是理念，不仅代表一种客观的知识，告诉我们“是什么”；更重要的，它还是一种实践，让我们学会如何辨认、形成和追问种种价值

2 日语助词“ばかり”的诸用法

性的问题，去探寻“为什么”和“应该怎么做”。唯有如此，才能从“求知”上升到更高一层的“求智”，在 AI 时代重返“挚爱真善美，关切天地人”的精神家园。

春江水暖，鼎新者当作先知；继往开来，人文者当为人先。让我们共勉。

北京科技大学外国语学院

2019 年 4 月

前 言

由于在汉语语句中缺乏对应的语法成分，因而日语助词一直是日语学习的一大难点和重点，尤其是助词“ばかり”，学生在日语学习的最初阶段就会遇到“雨ばかり降る”这样的例句，但学习了很多年可能还不懂“割れんばかりの拍手”这样的特殊用法。日语助词“ばかり”用法繁多，仔细分类能有十种以上。

由于“ばかり”用法繁杂，长期以来，不论在日本还是在中国关于它的研究都很兴盛。在日本，学者最初是把助词“ばかり”当作副助词来研究论述的。宫田（1948）在给提示（とりたて）助词命名时，并未将助词“ばかり”归入提示助词。之后，教育科学研究会東京国語部会・言語教育研究サークル（1963）、鈴木（1972）等使用提示助词这一称谓，并逐渐将副助词（含有“ばかり”）也包含了进来。而“ばかり”被普遍认为是提示助词则是自寺村（1981）以后，确切地说是自沼田（1986）以后。此后，中西（1995）（2001）、益岡（1992）、定延（2001）（2003）等便将“ばかり”作为提示助词，并不断进行研究。

但是，统观先行研究，对于“ばかり”的研究大多只侧重其多种用法的一种，很少有完善系统的分析。目前，对于“ばかり”的研究大体可以分为三类：一是研究“ばかり”用来提示时的用法，如沼田（1986）（2000）、中西（2001）、安部（2000）、茂木（2002）的研究等；二是研究“ばかり”のアスペクト的用法，即表示动作刚发生或只剩某动作未发生的用法，如高瀬（1997）、前田（2001）、小林（2003）的研究等；三是研究“ばかり”表示概数、程度的用法，如森田（1968）、丹羽（1992）、丸山（2001）的研究等。而将“ばかり”这三种主要用法一起研究的，目前只有沼田（1986）（2000）（2009），而沼田（1986）（2000）（2009）的论述也是只侧重于研究

2 日语助词“ばかり”的诸用法

“ばかり”用于提示、限定时的用法，对其另外两种用法并没有展开详细的论述。

同样，国内对于“ばかり”的研究大多只侧重于对每种用法的研究，很少有完善的、系统的分析。例如，研究“ばかり”表示程度的用法的学者有姜淑芳（1984）等；研究“ばかり”のアスペクト用法的学者有戴璨之（1995）等。

同时，关于“ばかり”的用法，除了上述3种常见用法外，还有“ばかりか”“ばかりに”“んばかり”等派生用法，而将“ばかりか”等用法与“ばかり”的常见用法放在一起研究的还很少。综上所述，国内国外对于“ばかり”的研究还不够深入全面。

本书以从新潮文库100册（CD-ROM版）中抽出的所有含“ばかり”的例句为例，对于日语助词“ばかり”的各种用法进行分析，如在句中的位置和所属成分等，并对其用法进行分类整理。因为“ばかり”的用法繁多，传统的“ばかり”用法的分类方法无法囊括所有的用法，所以笔者借鉴认知语言学的认知角度，对“ばかり”的所有用法进行了重新分类，并分析各用法的分布特点和各用法之间的联系和不同点等。

对于日语助词，大多数著作都是分类解析，即围绕某一个助词，在某一类助词项下进行讲解分析，但是围绕同时分属于不同类别的助词进行的分析常常会散落在语法书的各处，不集中且不利于对于知识的体系化整理。本书是笔者在博士论文的基础上整理的，详细阐明了“ばかり”各用法的分布特点和不同点。笔者使用大量例句，对日语助词“ばかり”进行了详细分类和集中分析，希望能够对日语助词的研究，尤其是限定系提示助词的研究提供些许帮助，也希望能够为日语研究者进一步研究日语助词“ばかり”的用法提供参考，为日语教育者的研究、教学和日语学习者的学习提供一定的理论依据和参考。

另外，考虑到本书的研究成果的重点在于提高日语水平，因此使用日语撰写。本书对日语的一个助词进行了分类分析，所以适用者为日语研究者、日语教育者和日语专业的学生等。

本书由五大章组成。在第一章序论里，笔者首先论述了日语助词“ば

かり”的先行研究和本书的研究方法，提出借鉴先行研究中的认知角度对“ばかり”进行全面分析。在第二章至第四章里，笔者根据“ばかり”上接和下接的词或句的不同，对其进行分类分析，提出“ばかり”用法的新分类以及分类的标准和条件，明确了不同用法之间的连续性和各种用法在句中的位置偏好，并找出了“ばかり”的本质特征。在最后一章即第五章里，笔者进行了归纳分析。

朱 琳

2020年7月

目 次

第一章 序論	1
1. はじめに	1
2. 先行研究	1
3. 本研究の立場と目論見	7
3.1 「スキヤニング考察」の適用可能性	7
3.2 「ばかり」の曖昧性	16
4. 本論での課題	20
第二章 「名詞（句）+ばかり」における「ばかり」の 諸用法について	23
1. はじめに	23
2. 考察	24
2.1 「名詞（句）+ばかり+は/が/も」	24
2.2 「名詞（句）+ばかり+の」	32
2.3 「名詞（句）+ばかり+で」	42
2.4 「名詞（句）+ばかり+か」	50
2.5 「名詞（句）+ばかり+だ/である」	53
2.6 「名詞（句）+ばかり+述語句」	57
3. まとめ	60
第三章 「動詞（句）+ばかり」における「ばかり」の 諸用法について	65
1. はじめに	65
2. 考察	66

2	日语助词“ばかり”的诸用法	
2.1	「タ形+ばかり」	66
2.2	「テ形+ばかり」	81
2.3	「ル形+ばかり」	88
3.	まとめ	105
第四章 「形容詞/形容動詞/副詞など+ばかり」における「ばかり」の諸用法について		
1.	はじめに	109
2.	考察	110
2.1	「形容詞+ばかり」	110
2.2	「形容動詞+ばかり」	119
2.3	「副詞+ばかり」	123
2.4	「感動詞/連語/〇+ばかり」	124
3.	まとめ	126
第五章 結論と今後の課題		
1.	はじめに	127
2.	用法分化の条件と連続性	128
3.	用例分布の特徴と用法の偏り	133
4.	課題の設定条件	137
5.	「ばかり」の本質的な特徴	138
6.	今後の課題	139
参考文献		143
用例出典		146

第一章

序 論

1. はじめに

現代日本語の助詞「ばかり」には多様な意味や用法がある。構文上では、名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞など多種類の成分と共起でき、その表す意味も、限定、比況、程度など多岐に渡っている。このような煩雑な用法の中で、例（1）：「雨ばかり降る」のように日本語学習者がごく初級で学習する用法もあれば、例（2）：「割れんばかりの拍手」のような上級表現として教わる用法もある。

本研究において、筆者は、「ばかり」のすべての用法を新しく分類するため、「ばかり」のあらゆる用法を分析対象とする。また、「ばかり」のあらゆる用法を記述説明するための枠組みや「ばかり」の用法の分類方法を探りたいと考えている。

2. 先行研究

現代語「ばかり」は、伝統的な国語学の背景を持つ研究では、副助詞として研究されてきた。しかし、とりたてという概念が確立してから、「ばかり」はとりたて詞またはとりたて助詞として認識されるようになった。「とりたて助詞」と命名したのは、宮田（1948）である。宮田（1948）

2 日语助词“ばかり”的诸用法

では、「取り立て助詞というのは文または句の一部を特に取り立てて、その部分をそれぞれの特別の意味において強調する助詞である」(p.178)と定義している。しかし、宮田(1948)では、「だいたい普通の文法でいう「係助詞」に当たる」(p.178)とし、「ばかり」を「とりたて」に入れていなかった。その後、宮田(1948)で命名された「とりたて」という用語は、教科研東京国語部会・言語教育研究サークル(1963)、鈴木(1972)などで取上げられ、従来の副助詞(「ばかり」を含む)まで含めた文法範疇に使用されるようになる。「ばかり」が「とりたて助詞」との認識が一般的になったのは、寺村(1981)以降、実質的には沼田(1986)以降だと言われる。それ以来、沼田(1986)(1992)、中西(1995)(2001)、益岡(1992)、定延(2001)(2003)など、多くの研究者が「ばかり」をとりたて詞またはとりたて助詞として扱い、研究を重ねている。

「ばかり」の諸用法についての先行研究の蓄積は大きい、その分類方法や分析対象とする範囲などは異なっている。先行研究をまとめてみると、「ばかり」の用法はとりたて用法(例(1):雨ばかり降る)、アスペクト的用法(例(3):引っ越してきたばかりだ)、程度用法(例(4):リングを三つばかり買う)の三つに大別することができる。しかし、その三つの用法の境界や連続性は明確とは言えない。

また、この三つの用法を個別に研究したものが多い。例えば、とりたて用法について、沼田(1986)(2000)、中西(2001)、安部(2000)、茂木(2002)などがある。その中の代表的なものをここに再掲する。例えば、沼田(1986)では、「ばかり」の意味は「主張・断定・自者肯定、かつ含み・断定・他者否定」(p.198)である。また、「とりたて詞の一般的特徴を持っている。つまり、「ばかり」は任意性があり、連体内内性を持ち、非名詞性、分布の自由性も備えている」(p.198)と述べている。それから、とりたて詞には3種類のスコープ、つまり「直前スコープ(Normal scope または N スコープ)、後方移動スコープ(Backward scope または B スコープ)、前方移動スコープ(Foreward scope または F スコープ)」(p.145)を持っているとし、「ばかり」は「とりたて詞に考えられる3種類のスコープをすべて持つ」(p.199)としている。中西(2001)では、

教育文法の視点から、日本語教育における単機能と複機能の「ばかり」を説明し、単数のものを取りたてる「ばかり」を典型的な複機能とは区別し、単機能の「ばかり」を学習者に正しくアウトプットさせるためのルールを提案した。つまり、単機能には二つのタイプがあり、それぞれ以下のような条件が整ったときに用いられるものである。「一対一対応タイプ）単数のものを取りたてる。一対一対応の対比的な要素が一つだけ暗示されていて、それについてはとりたてられているものとはまったく逆のことが暗示されている。一対多対応タイプ）単数のものを取りたてる。対比的な要素が複数暗示されていて、それについてはとりたてられている単一のものとはまったく逆のことが暗示されている。ただし、一対一対応になるか、一対多対応になるかは文脈に依存している」（p.48）である。

アスペクト的用法について、高瀬（1997）、前田（2001）、小林（2003）、洪（1994）などがある。その中の代表的なものをここに再掲する。例えば、小林（2003）では、アスペクト的観点から動詞に後接する「テ形ばかり」が、どの局面を切り取ってみても、その事態が成立している状態で発見されることを表し、「辞書形ばかり」は事態を分割せず、まるごと捉えた上で限定していることを述べた。そして、「辞書形ばかり」の用法の観察を通して、「他者否定」に重点がある「ばかり」から「自者肯定」に重点があるものまで、連続的に分布している様相を提示した」（p.13）と述べている。高瀬（1997）では、ダブルテンスの観点から、「スル バカリダ」の意味・用法をまとめた。以下のようなものである。

- 《限定》
- ①非過去形＋非過去形
 - ②（過去形＋非過去形 文脈によって）
 - ③非過去形＋過去形
 - ④（過去形＋過去形 文脈によって）
- 《変化の過程》 ①非過去形（変化動詞か、それに類するもの）＋非過去形 ②——①

① 高瀬（1997）では、《程度》《出来事の直前》については、用例も不足しており、結論は留保しておきたいとしている。

4 日语助词“ばかり”的诸用法

③非過去形（変化動詞か、それに類するもの）＋過
去形 ④——

《出来事の直後》①—— ②過去形＋非過去形
③—— ④過去形＋非過去形」(p.9)

前田（2001）では、「～したところだ」と「～したばかりだ」の相違点および、夕形による表現との違いについて考察した。

程度用法について、沼田（1986）（2000）、森田（1968）、丹羽（1992）、丸山（2001）などがある。その中の代表的なものをここに再掲する。丸山（2001）では、「「ばかり」は、「だけ」同様、すべての構文的位置に〈限定〉（〈とりたて〉）の用法がある。但し、副詞的修飾成分の場合は、〈程度〉の用法が主となる。また、〈アスペクト〉・〈比況〉・〈原因〉など派生用法が多い」（p.153）とし、また、「連体修飾成分には、〈とりたて用法（限定）〉とともに、〈程度用法〉が多く見られる。「ばかり」の〈程度用法〉は、〈概量〉以外、〈高程度〉に限られるようだ。そのあたりが、他の助詞と異なる」（p.152）と述べている。さらに、「〈程度用法〉と〈とりたて用法〉は連続的である」（p.159）と記述している。丹羽（1992）では、「ばかり」の表す程度を概量と高程度に分け、高程度を表す場合、動作性詞述語に伴う時、つまり多く「んばかり」という形で用いられる高程度は、「内限定^①の1種として理解できる」（p.1135）としている。

それから、とりたて用法とアスペクト的用法、とりたて用法と程度用法をそれぞれ合わせて研究したものはあるが、三つの用法を一括して扱った研究はごくまれである。管見の限り、沼田（1986）（2000）（2009）だけである。しかし、沼田でも言及するにとどまり、詳しく研究されていない。沼田（1986）では、「ばかりも先の「だけ」などと同様、とりたて詞の一般的特徴を持っている。つまり、「ばかり」に任意性があり、連体文内性を持ち、非名詞性、分布の自由性も備えているのである。（中略）た

① 丹羽（1992）では、「ばかり」の表す限定を、外限定と内限定の二つに分けている。限定とは、当該事態が唯一成立して他の事態は排除されるということだが、それには、他の事態を排除することに重点がある場合と、成立するのは当該事態で尽くされるということに重点がある場合がある。前者を「外限定」、後者を「内限定」と名付けた。

だし、数量詞には後接できない。数量詞につく「ばかり」はすべて、およその数量を表す形式名詞の意味、機能しか持たない。(中略)「ばかり」は限定の意味を持たず、どちらも「およそ3個」や「およそ10人」とおよその数量を表す」(p.198-199)とし、「アスペクト詞とも考えられる「だけ」や「ばかり」も(中略)とりたて詞としての限定の意味からの派生と考えられる」(p.201)としている。沼田(2000)では、「「ばかり」に関する形式副詞の中の各種の用法やとりたて詞との連続性はまだ十分に捉えられない」(p.205)としている。また、沼田は(2000)(2009)では、アスペクト的用法について、「助動詞的」「慣用的」、概数量の用法については歴史的用法の残存などと記述している。したがって、沼田(1986)(2000)(2009)では、限定(狭義のとりたて用法)の研究に注目が偏重し、各用法について離散的な研究が積み重ねられてきたとわかる。

しかし、「ばかり」には大別された三つの用法以外に、「ばかり」には「ばかりに」「ばかりか」「んばかり」など派生的な用法が多い。これらの用法と「ばかり」本来の用法の関連なども、まだ明らかにされていない。また、三つの用法の確かな区分は、現時点では困難だと言えよう。数多くの先行研究でもこのことについて言及している。例えば、丹羽(1992)では「んばかり」という形で用いられる高程度は、内限定の1種、つまりとりたて用法として理解できると述べている。それから、この三つの用法の連続性について、数多くの先行研究では言及している。例えば、以上で述べたように、沼田(1986)では、「アスペクト詞とも考えられる「だけ」や「ばかり」も(中略)とりたて詞としての限定の意味からの派生と考えられる」(p.201)とし、沼田(2000)では、「「ばかり」に関する形式副詞の中の各種の用法やとりたて詞との連続性はまだ十分に捉えられない」(p.205)としている。しかし、この三つの用法の連続性をはっきり整理した先行研究は、管見のかぎり、まだ見つかっていない。さらに、よく研究されてきたとりたて用法だけでなく、とりたて以外の用法も広く用いられている。「ばかり」という同形態で表されている以上、日本語文法上の合理的な説明が必要である。学習者への説明においても、用法の分化のしくみを明らかにする統一的な枠組みが必要であるだろう。

6 日語助詞「ばかり」的諸用法

本研究では、「ばかり」のあらゆる用法をすべて見ることにする。とりたてて助詞またとりたてて詞として研究されてきた「ばかり」(例(1)など)も、アスペクト詞として研究されてきた「ばかり」(例(3)など)も、形式名詞として研究されてきた「ばかり」(例(4)など)も、形式副詞として研究されてきた「ばかり」(例(2)など)も、すべて見ることにする。「ばかり」のあらゆる用法を記述説明するため、一貫した研究方法を探りたい。

数多くの先行研究の中で、興味深いのは定延(2001)(2003)で用いられる探索という心身行動に着目する認知主義的アプローチである。定延(2001)では、「探索とは既知領域の拡大行動である。典型例を言えば、未知の空間がどんな様子なのか調べることである」(p.118)と定義している。たとえば、「初めて訪れた見知らぬ街を、「どんな様子か?」という意識で見回す」(p.118)こと、または、「すでにある程度知っている街でも、「どんな様子か?」という意識で改めて見回してみる」(p.118)ことである。例えば、

(5) 三太郎はただしょんぼりと、とぐろを巻いておるばかりであった。

例(5)では、「三太郎はとぐろを巻いておる」というデキゴトは一つだけだが、探索は複数回であるという。「つまり、「どうするだろうと三太郎の様子を見る(探索する)と、三太郎はとぐろを巻いておる」「もうそろそろ三太郎は何か動きを見せるだろうと様子を見る(探索する)と、三太郎はやはりとぐろを巻いておる」「なおも見る(探索する)が、相変わらずとぐろを巻いておる」という具合である」(p.132)。

定延(2001)では、「ばかり」のいわゆるとりたて用法についてこの説明を行っている。また、澤田(2007)では、定延(2001)の探索の定義と同じ立場をとりつつ、走査^①という概念として使用し、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法について分析を行った。その結果、「ばかり」の

① 澤田(2007)では、「連続走査」を「時間概念を状態の連続の中に組み込むこと、つまり展開された状態の連続を時間順で追っていくこと」と定義している。また、自身の説を「基本的に定延(2001)の立場をとるものである」(p.134)としている。